

木県の母の実家に落ち着いた。

母は復職し、北押原小学校に勤務し、子供五人を育てていくことにした。その努力が認められ、昭和三十七年五月十三日、母の日に栃木県知事から模範母親表彰を受けた。翌日の下野新聞に、満州引揚げの一教員が女の手一つで三男二女の教育に身を捧げた姿をたたえる記事が載った。

その母は、平成八年十一月十七日に八十五歳である世に旅立った。二十二日の横浜・妙蓮寺斎場での葬儀で、私は喪主として次のような挨拶をした。

「私の家族は、戦前に中国の旅順に住んでおりましたが、終戦の年に父を失いました。私が十歳のときでした。栃木県に引揚げ後、母は小学校の教師に復職して私たち兄弟妹五人を育ててくれました。

子供たちそれぞれ独立した後は、戒名「浄孝歌仙大姉」に「歌仙」とありますとおり短歌を趣味として、二冊の歌集「乳母車（昭和五十五年）」「楡の街（平成三年）」を自費出版しております。

母は八十五歳の天寿を全うしましたが、父と母はわ

ずか十一年間の夫婦でしたし、天国の父は三十四歳のままでしょうから、五十一年ぶりの再会がうまくいくかどうか、母が迷子にならなければよいがと、今、そんなことをふっと考えております」

満州根こそぎ動員より引揚げまで

神奈川県 佐藤 令一

はじめに

昭和二十年、私は三十八歳の陸軍二等兵だった。五月の「満州根こそぎ動員」によって牡丹江の奥地樺林部隊に入隊した。応召したとき、私は伝統ある官立旅順中学校で数学の教官として昭和二年以降十八年間は教鞭をとっていた。この中学校は日露戦争後満州で活躍している日本人子弟の教育の場として、日本政府が明治四十二年に創設した満州における草分けの官立中学校であった。

五月十二日、私は学徒動員の引率教官として旅順市

から四十キロ離れた大連市外の甘井子の工業地帯で勤務中に赤紙を受け取った。当時の召集者は隣近所にも極秘扱いで出発日には家族の見送りの許されなかった。駅頭で監視に当たっていた憲兵の鋭い眼光が、ただに脳裏に焼き付いている。妻は自宅で私を見送るや否や、見張りの厳しい旅順駅を避けて、バスで四十キロ離れた大連まで直行し駅頭で見送ってくれた。お互いに声の聞き取れる距離ではなかったが、私に向かつて何か叫んでいる姿がよく見えた。

列車は広大な満州を一路北上し、二十二日の夜明けによりやく満州の軍都牡丹江に到着した。ここで編成替えがあり一緒に応召した旅順高等学校の海野、樫村両教授や旅順中学の芦沢教諭とは今生の別れとなった。私は更に佳木斯行きに乗り継いで駅舎もない草原の小駅で下車、未明の原野を黙々と一時間ほど歩き樺林部隊に着いた。午前四時ごろだったと覚えている。

私が所属した内務班は新兵二十三人で、同僚の平沢教諭、旅高の常盤教授も一緒だった。他に十人ほどの開拓団の青年がいたが、開拓団の一番の働き手である

彼らを根こそぎ引き抜いてしまつて一体どうなるのかと、深く心を痛めずにはおられなかった。その後の悲惨な話を聞くにつけても当時の関東軍のとつたあまりにも無謀な措置に憤りを感じずにはおられない。

内務班における生活

内務班で古年次兵が「これは天皇陛下からの御下賜品だ」と言つて襦袢、袴下などの支給があつたが、粗末な物が多く支給当日にすぐ苦手の針仕事を必要とした。

毎朝食前に木銃を使用する訓練が日課になっていたが、二十三人の新兵に対し、木銃は十八丁しか無く「起床！」の号令一下、新兵たちは先を争つて木銃架へと殺到した。しかし、五人だけはどうしても木銃を取り損なうはめになり、上官からこっぴどくどなられた。木銃の絶対数が五丁不足しているのだから当然のことだったので、私は代表して上官に木銃の早期補充を恐る恐る懇願した。ところが上官はいきなり「貴様、文句を言うのか！」と私の顔面にビンタを食らわせた。私のとつた当然の行為がここでは通用せず、一

方的に文句としてののしられピンタに値するものになろうとは、夢にも思っていないかった。

また、軍隊は衣服に体を合わせ、帽子に頭を合わせるところと聞き及んではいたが、不幸にも私は軍靴に足を合わせるはめになったがこれはつらかった。いまだに左足の親指の爪が変形し変色しているのは、軍隊生活における苦行のモニュメントなのである。私の二等兵としての内務班生活は日々悲哀の連続だった。

転属・人間爆弾の運命

七月二十五日、一期の検閲を終え、中隊は某方面に移動することになり「午前九時宮庭に集合」と発令された。集合の五分前、私の運命は大きく変わった。「貴様はここに残留せよ」と命令された。私はみんなとの同行を懇願したが許されず、辛苦を共にしてきた平沢教諭を含む中隊全員と、今生の別れとなった。十時に中隊本部の准尉から「新京師団司令部の事務要員として転属せよ」と命ぜられた。新京は南満州鉄道の基幹都市なので内心喜んでいたところ、午後二時になって一転し「先程の命令は取り消す。楊木林ヤンムリンに新たに

編成された特殊部隊に転属せよ」となった。

かくして私は、七月三十一日未明に他の転属者と共にこの特殊部隊に転じた。楊木林は新京から約百キロ南にあって四平街のすぐ北にある小都市だった。特殊部隊の任務は、爆雷を胸に抱いて自ら掘った蛸壺状の壕に身を潜め、戦車が二十メートル先まで接近したときに飛び出て体当たりして爆破するという「人間爆弾」で、私たちは毎日模型の爆弾を抱えて訓練に励んでいた。

八月十四日の夜半、「直ちに所期の任務を執行せよ」との命令が下った。任務とは十五日夕か十六日早朝に南新京でソ連戦車を攻撃することである。

翌十五日未明、班員三十人は悲壮な見送りを受けて肅々と営門を出発し、爆雷受領のため新京市内にあった満州映画株式会社の社庭に向かった。ところがどうした訳か爆雷受領時刻の午前九時になっても肝心な爆雷が到着せず、いったん近くの仮兵舎に引き揚げて待機することとなった。夜になると満軍の反乱が起きたとかで、新京市内から火の手があがった。徹夜で仮兵

舎の周辺に塹壕を掘ったが、折からの豪雨に見舞われ作業は困難をきわめた。

翌十六日、上官の命により戦友と二人で市内の倉庫に米受領に出た。昨夜の雨で壁からはがれた新聞が落ちていた。何気なく見ると「日本が無条件降伏し、十五日正午天皇の大詔がラジオで放送された」とあった。この時、私は同行の戦友とただ放心状態になって、お互いの顔を見つめるだけだった。もし大詔が一日でも遅れていたら、当然我が身は北満の広野でこっぱみじんに飛ばされていたと思うと身震いを覚えた。

召集解除・脱出

八月二十二日、部隊は范家屯（ひんかとう）という部落で武装解除を受け日本兵は丸腰になった。この部落には砂糖大根を原料とした大きな製糖工場があったが、中国人はこの工場の高い塀の上に登り、手に手に「青天白日旗」を打ち振り、万歳を叫び、武装解除を受けた我々を罵倒し熱狂していた。

私は悔しい思いと同時に、祖国の敗戦がもたらした悲哀の現実を、嫌というほど思い知らされた。八月二

十七日に小隊長から「明日はシベリア行きになるらしい。現地召集の者は家族のもとに帰ってよい。ただし、生命の保証は一切ない」と内々の伝達があった。

この時、部隊と共にシベリアに行くか、それとも危険を冒しても旅順に向かうかの二者択一の行動方針に、自ら決断を下すのにはしばらく苦悩した。結局、一世一代の決断をして同調者を探したがいなかった。私は砂糖を軍足に詰めた二包と親指大の岩塩塊を敷布に包んで脱出準備をした。午後二時ごろ隣の中隊の十人ばかりが使役で荷車を引いて営門に向かうのを見つけ、その仲間になりました。営門には二人のソ連兵が立哨していたが、予想どおり員数計算には疎かったのでまふまふと脱出に成功した。

苦難の逃避行

営門脱出には成功したが、これから大連までたどり着くには線路沿いに約六百キロも歩き続けねばならず、果たしてそれだけの体力が続くかどうか不安だった。百キロ先の四平街まで行けばなんとかなるだろうと線路に出た。そのとたんに私の計画があまりにも甘

くずさんであったことを悟った。

線路脇には随所に衣服をはぎ取られ真っ裸にされた日本人の死体が幾つも転がっているのを見た。その死体は無残にも野犬に食い荒らされて、到底、正視できない惨状だった。私は急ぎ中国人の部落に入り、信頼のおけそうな中国人と掛け合って砂糖一包と中国服一着とを物々交換した。私はすっかり中国人の恰好に变身した。

徒歩で線路沿いに南下することはとても危険であることを知り、列車利用を考えた。そこで、ソ連軍の列車の運行時刻を観察し、大体六時間毎に長い貨車が空車で南下し、物資を満載して再びソ連本国に向かって北上するパターンに気付いた。南満州の各地からあらゆる物資や機械類を本国に持ち去るといふ強盗まがいの行為を堂々とやっていたのである。こうして私は長い南下貨車の後部に潜入することに成功した。

しかし、ソ連軍司令部のある公主嶺であえなく発見され下車させられた。私は両手を挙げながら、とっさに知っている限りのロシア語の単語を口走った。もち

ろん言葉にはなっていない。「ありがとう」「こんにちは」「さようなら」といったあいさつ言葉の羅列だったが、それが通じたらしくソ連兵は銃口を下に向けてくれた。私は助かったと思ひ、彼に万年筆を渡した。彼は満足そうであった。私は「疲れているからしばらくこのホームで休ませてくれ」とジェスチャー混じりで頼んだ。即座に承知してくれた。時々薄目をあけて駅の様子をうかがっていたところに、満鉄社員らしき日本人の駅員から南下する貨車の運行予定時間を知った。「この貨車は、明朝六時に出発の予定」とのことだ。最後部の車両に乗せてくれた。公主嶺は何とか出発したが、四平街で再び身分を見破られて下車させられた。

この日、四平街駅は終戦後初めて新京発奉天行きのお客様が来るといふので中国人や日本人の避難民の群れがホームに溢れていた。私もいざというときはこの群れの中に紛れ込むつもりでいた。やがてその客車が到着したが、奥地からの避難民で超満員の状態で、窓にまでぶら下がっている有様だった。しかしこの客車を

逃しては大連に帰り着けない、この客車こそ我が命の綱と心の中でつぶやき必死になって屋根にしがみついた。折あしく降り出した大粒の雨が顔を激しく打ったが、死に物狂いで耐え忍んだ。やっとの思いで奉天駅に到着した。時計は既にダワイされていたので正確な時間は分からないが、多分午後六時ごろだったと思う。ホームに降り立ったがじっと立ってはいられないぐらい疲れていた。

親切な日本人の駅員がいて、「明六時に大連行きの客車がここから出る」と極秘情報を教えてくれた。そして親切にもホームから大分離れた所に停車していた客車に案内してくれたが、車内にはまだ乗客は一人もいなかった。素っ裸になり着ていたものを乾かしたり、疲れた両腕を揉んだりして夜明けを待ち望んだ。

八月二十九日朝六時、いよいよ大連行きの列車が発車したが客車は中国人や日本人の難民で満員となった。私は中国人に取り囲まれた恰好になったので窮余の一策として完全なるあ者で通すことにした。石河

駅に近づいたときに一難がやってきた。中国兵とソ連兵による日本人狩りが始まったのだ。不運にも発見された日本人は列車から引きずり降ろされて、待機しているトラックに乗せられていったが、その人たちの運命はどうなったであろうか。私は中国人に変装していたが一秒一秒が全く命の縮む思いだった。幸い見破られずに過ぎた。激しい疲労感に襲われた。夕方、夜毎に夢に見た大連駅にやっとう到着した。

思えば、五月十九日に私はこの駅から、遠くから妻の見送りを受けて関東軍の一兵士として出征してから三カ月がたち、今はみすぼらしい姿でだれ一人の出迎えもなく悄然として降り立ったのだが、私の目には駅の様子も住民の行動も格別に変わったようには見られなかった。

ともかく私はすぐに、平田先生のお宅に急いだ。當時は私立大連高女の校長であったが、私の不意の帰還に驚かれた。早速に御夫妻のご好意に甘え、入浴し衣服を替え、心尽くしの夕食を頂き、蚊帳の中で先生とゆっくり枕を並べた。逃避の苦勞話を報告しているう

ちに涙が止めどもなく溢れ出た。夕食の味噌汁の味が忘れられない思い出である。

旅順で家族との再会

私は、幾度となく強運に恵まれて再び旅順の地を踏むことができた。それは終戦の日から半月たった八月三十一日の午後一時ごろだった。旅順との決別の日にこれがこの世での見納めかと悲壮な覚悟で見上げたあの白玉山の表忠塔も、前のまま厳然とそびえていた。私はここに眠っている英霊による温かい加護に対して、深々と頭を垂れて感謝した。

敗戦前には駅前に屯していた客待ちの人力車やマーチョは一台もなく、辺りは不気味なまでに閑散としていて、日本人もまばらで、特に女性は全然見かけなかった。

帰宅の途中、龍河のほとりの海で、ソ連兵が一糸まとわぬ姿で泳ぎたわわれている姿を見た。彼らは今ここでは無邪気に遊んでいるものの、いったん街に戻るに豹変する憎むべき男たちだ。時と所をかまわずに我々同胞に対し略奪、暴行、婦女凌辱といったあらん

限りの悪行を重ねる鬼畜同様の輩だった。

家の南側の野原まできたとき、長女の律子が変わり果てた姿の私を目ざとく見付けて、「あつ、お父さんが帰ってきた！」と叫びながら裸足のまま飛んできて私に抱きついた。娘のほのかな肌のぬくもりがえもいわれぬ心地がした。意外なことに、わが家の窓からは屈強な若者たちがそれぞれ身を乗り出して、一斉に私に向かって喜びの歓声をあげていた。

留守中に男手のない私の家族の不安を気遣って寝泊まりしてくれていたのだった。同僚の応召家族のなかには「佐藤さんの家が一番安全だわ」と言ってわざわざ泊まりにくる始末だったそうだ。その夜、混乱した旅順の街の実態を聞き、深い憤りを禁じ得なかった。

旅順中学校との別れ

私は、永年勤務した旅順中学校のその後が気になって仕方がなかった。帰宅した翌日早速に学校に行ったが、ソ連兵が銃を持って立っており校内に入ることができなかった。校長たちが寄宿舎に詰めているらしいので寄宿舎を訪れた。校長に復員の報告を済ませ、学

校職員を証明する腕章をもらい、ようやく校内に入ることを許されたが、二十年近くも精魂を打ち込み、我が分身とさえ思ったこの校舎に自由に入ることができないとは、夢にも考えなかったことで、敗戦国民の惨めさを改めて痛感した。思い出多きこの校舎ともこれで別れかと思ひ、壁をなでながら涙が流れた。

旧市街への強制移住

ソ連軍は、新市街に住んでいる我々に対し突如として「九月二十日までに旧市街へ移住せよ」と言ってきた。私たちは、以前から謡曲仲間として親しく付き合っていた矢幡さんの厚意により、同家の応接間を借りることとなった。矢幡さんは石炭販売業を手広く経営する旅順経済界の重鎮で、屈指の豪商だった。戦前には、旅順港にわが艦船が入港するたびに海軍の謡曲仲間と一堂に会して歓迎謡曲会を催していた。その場所は恒例として要港部の近くにあった矢幡邸の大広間と決まっていた。その邸に住むことになったのだ。

移って間もなくのこと、ソ連海軍将校数人の歓迎パーティーが催された。私は万が一のことを考えて、応

接間に婦女子を避難させて扉を嚴重に施錠した。

彼らは、料理が出るたびに乾杯を重ねた。彼らの乾杯は飲み干した後には必ずコップの底を周囲の者に見せ合うのが習慣で、文字どおり乾杯だった。日頃酒に自信があると豪語していた学生たちも、強烈なウオッカの連続乾杯にはさすがにこたえたらしく腰が立たないほどだった。そうこうしているうちに無事終宴となり一行を送り出したが、途端に何事もなかった安堵感から、今までの疲れがどっと出て思わず玄関に座り込んでしまった。

また、矢幡家では養豚もしていたので、倉庫には豚の飼料の屑うどんが袋詰で大量に貯蔵されていた。その屑うどんを分けてもらい、妻は上手に味付けして食べさせてくれた。屑でもうどんなど口に入らないときだったので、皆大変に喜んだものだった。

旅順との決別

「旅順市の日本人は十月中に大連市へ移住せよ」とソ連軍当局から敵命が下ったのは、確か九月末ごろだったと思う。十月中旬になると、旅順在住の日本人の

大集団が、大車グレイチョに寝具や炊事道具などを満載して約四十キロに及ぶ旅大道路を埋め尽くした。まさに哀れな敗戦者の大移動だったが、そのときに我々同胞が味わわれた屈辱的な悲惨な体験は、終生私の脳裏から消えることはないだろう。「祖国日本はどうなっているだろうか」「大連市での難民生活はいつまで続くのだろうか」「我々は果たして祖国に帰れるのか」と不安が募っていた。明日の命さえも保証されないどん底の状態だった。大連に向かっていた大車が途中で中国人の暴徒に襲われ、めぼしいものはことごとく略奪されたという話も流れた。私たち一家四人はひたすら無事を祈りつつ大連に向かった。

白銀山トンネルに差し掛かったとき、白玉山の表忠塔が見えた。旅順もこれが今生の見納めかと思うと万感胸に迫る思いを禁じ得なかった。幸いにして途中での略奪襲撃などにも遭遇することもなく、平田元校長の紹介による須古さん宅に到着しや々と安堵の息を吐いた。

大連での苦難な生活

大連に落ち着いて数日後、律子の体に異常なむくみがでた。心配して早速に医者にかかったが大事に至らず快癒し、ほっとしたが「どんなことがあっても、四人揃って内地の土を踏まなければならぬのだ」と、このとき改めて心に深く誓った。

「大連での難民生活はいつまで続くのだろうか」「その間、何をして食べていけばよいだろうか」と思案しながら変わり果てた大連の街を歩いた。街角では日本人の大人から小学生に至るまで煙草や南京豆の立ち売りをしていた。奥さんたちが自分の晴れ着を売っている姿を見て痛々しく感じた。

当時、水谷君という旅工大子科の学生が私たちと生活を共にしていたが、彼とも相談した結果、日本人にとって最高の栄養源である味噌の立ち売りを始めることにした。

我々は朝早くに聖徳街という中国人部落に出掛けて、そこそこの量の味噌を仕入れ、三越デパート横の広場で二人でわか商売を始めた。「さあさあ、どな

たのお口にも合うおいしい味噌はいかがですか」と声をからし手を叩いて呼びかけた。水谷君は「先生のかげ声にはどこか悲壮感が漂っていますね」と冷やかしたが、一家の生活がかかっているので必死だった。一方、長男の倬二(中一)はソ連将校宅の暖房焚きの作業を三日に黒バン一本の契約で、毎日顔も服も真っ黒になって働いたが、約束を守ってくれたのは最初だけで、相手は約束を履行する意思がなさそうだったので、あっさりとやめてしまった。

石井二等兵との再会

十一月中旬のこと、私が小村公園の前を歩いていたとき突然「佐藤、貴様どこにいるのか!」と大声でどなる声があった。意外にも声の主は石井二等兵ではないか。「石井、貴様生きていたのか!」私も驚きの声を発した。この石井二等兵とは樺林部隊で一緒だった。内務班こそ違っていたが、石井は御殿場出身、私は掛川出身の同県人だったので親しく話し合う仲だった。彼は七月二十五日、我が中隊が某方面へ移動と決まったとき、彼はちょうどパラチフスにかかって入院中だ

ったので中隊と同行しなかった由、これが人生の分かれ道、やがて全員がシベリア行きの運命になったとき、私の消息を知り彼も脱走の好機到来を狙っていたそうだ。自分で偽造した公用腕章を着けて堂々と営門を突破して脱走したとのこと。あっぱれと言うほかなかった。

彼は大連に逃げてきて、連鎖街にある「勝又洋服店」の支配人になっていたが、その店の近くに「金鳳堂」という書店があつて、私をその店に連れて行つた。「貴様はいずれこの大連に来るだろうと思つて良い働き口を決めておいた。この金鳳堂書店で本を売れ」と親切な提案をしてくれた。こうして彼と偶然に出会つたことが、祖国へ引き揚げるまでの六百日に及ぶ大連での我が家の苦難な生活を支えるための糧を得るきっかけとなった。

金鳳堂書店の開業

金鳳堂は神戸にも支店を持つ大きな書店だったが、主人が召集され残された若い二人の娘さんだけで細々と店を守っていた。石井は「これからは本は間違いな

く売れる」と言って勧誘した。私は彼の言に従って、娘さんと一緒に本屋の仕事をする事になった。書棚は空っぽ同然だったので古本収集の作業から始め、私は妻に後押しをもらって大八車を引き坂道の多い市内を回った。引揚げが近づけば書籍は邪魔物になるので、容易に買い集めることができた。閑散としていた店の本棚も二日ぐらいで満杯になった。

この商売を始めた当初には、この混乱時に果たして本を読む人などいるのかといぶかったが、意外にも現実はその逆だった。夜は外出禁止、ラジオ放送も禁止、暖房もない重苦しい難民生活においてせめてもの慰めは読書しかなかった。戦時中の反動もあって本は飛ぶように売れ、特に理数系や医学の本は思い切って高値をつけたが、瞬く間に売り切れた。このようなすう勢を予見した石井の判断にはまったく恐れ入った。金鳳堂書店の営業は順調そのものだった。この間に極寒の冬を二度迎えた。重い本を大八車に積んで、つるつる滑る坂道を夫婦で助け合い励まし合いながら引張って回るのは重労働だったが、夫婦一体になって働

く生活体験は初めてのことでも楽しみも感じていた。

中国人のねらいは百科事典で、一等国、戦勝国になった体裁上、自宅の書斎や事務所の応接室に本を飾る必要に迫られていたが、それには金ピカの派手な表紙で分厚い日本の百科事典が恰好で人気を集めよく売れた。

大連市内の状況

上品な日本の老婦人が毎日立ち読みに来た。「すみませんねえ、買いたくないで」と遠慮がちに言いながら、実に楽しそうに読んでいた。その老婦人が十日ばかりしてぱったりと姿を現さなくなった。後で分かったことだが、その老婦人は金歯をしていたので、中国人の暴徒に襲われて三つに斬られて金歯を奪われたそうだ。この悲惨な事件はまさに敗戦国民の姿を示す証でもあった。

また、中央公園で日本の青年難民五人がアカシアの樹に集団首吊りをした。彼らは満州開拓義勇軍の青年たちで、ようやく危機を脱して大連までたどり着いたものの、飢えと寒さに耐えかねて生きる力を失ったの

であろう。この世をはかなんだ遺書がそばの枝に取り付けてあった。

大雪が降り続いたある日、中国側は日本人の家庭に一戸一人の除雪使役を命じた。命令に応じない家には一万円の罰金とのことで、子供を背負った母親やよろめく老人たちも駆り出される始末だった。

こんな悲劇は日本人だけではなかった。街中を中国人が大車に穀物入りの麻袋を満載して通り坂道に差し掛かると、御者は馬から下りて大声でわめきながら馬を引っぱって上って行く。そのすきを狙って隠れていた小孩たちが大車にはい上がり麻袋に次から次と穴をあけた。穀物が路面にこぼれ落ちると、小孩の母親らが手に手に塵取りとほうきを持って、落ちた穀物を集め袋に入れた。当時の母親は、纏足なのでよちよち歩きで動作が緩慢だった。そこにソ連兵のトラックが猛スピードで突っ込んで、そのまま通り過ぎた。この犠牲になった中国人たちの「ギャー」という断末魔の叫びが、金鳳堂の店まで聞こえてその悲惨さはとても正視できなかった。

敗戦後、最初に侵攻してきたソ連の囚人兵や中国人の暴徒たちによる略奪、暴行は目を覆うほどの無法状態だったが、二十一年の年明けごろになると、ソ連憲兵隊（ゲーベール）の活動によりやや沈静化してきた。

研数学館の創設

敗戦によって、従来の日本人小中学校は接収されてソ連軍の兵舎、中国保安隊の施設、中国人や日本人難民の宿舎などに使われた。したがって日本人子弟の教育は、場所がなかったので二部、三部授業を余儀なくされ、しかも学校名に「日僑」を冠するようにされた。ところが旅中の生徒たちは家族共々大連に強制移動させられ、ほとんど財産を投げ捨てていたため家庭の生活維持のための働き手で通学することができなかった。引揚げ後、日本の生徒と学力の点で遅れをとることはあまりにもかわいそうで、それが私の心配の種だった。市内の日本橋薬局の福原さんに打ち明けて相談したところ、西広場の救世軍の大きな建物を借りることができて、研数学館という塾を開校した。市内か

ら三十人ほどの生徒が駆けつけてくれたが、私の一番期待した旅中の生徒は一人も現れなかった。私一人では到底手が回りかねたので、旅中の平田元校長などに講師を依頼して授業を始め大変に好評だった。彼らも熱心に勉学に励んでくれた。あの大混乱期に向学心に燃える青少年たちに夢と希望を与えることができたのは教育者としての責務を多少なりとも果たしたと自負している。

二十一年五月ごろ、六人の中国青年が「高等代数と解析幾何を教えてください」と言ってきた。「我々は一等国民になつたので高等数学をしっかり学ばなければ世界に伍していけない」と向学心に燃えていた。私は「学問に戦勝国も敗戦国もない。しかしいきなり高等数学は無理だから初等数学から着実に学ぶのが常道だ」と諭した。市場の二階を臨時の教室として夜間授業を始めたが、夜は危ないということで私を毎夜、送り迎えしてくれた。向学心豊かで理解も早く教え甲斐があった。

この世の地獄

二十一年夏、私は「壞疽性虫垂炎」を患ったが危機一髪で一命を取り止めた。死亡の噂も流れたほどだった。病後しばらくして薩摩町の蛭名家に移った。かつて味噌販売を一緒にした水谷君とも同居した。当時は冬に向かつて燃料が極度に不足し、道端に落ちているちびた下駄さえも貴重だった。旅順から持ってきた電気コンロは炊事用になったり暖房用になったりで大活躍だった。蛭名家は「あなた方の引揚げまで、この家が持ちこたえるといいですね」と言い残して引き揚げていった。木造家は壊れない範囲で燃料にするところがたくさんあった。座敷の長押、床板など自分の燃料には心配がなく寒さに耐えることができた。二十一年、二度目の極寒の冬を迎えた。本当につらい冬で、寒さと飢えで日本人の死者は急激に増えた。

小高い丘の頂上にあつた火葬場に至る坂道には、布団や筵でくるんだ遺骸を抱いて火葬の順番を待つ日本人の遺族で埋まっていた。順番を待ちきれずに、遺骸を谷底に投げ捨て合掌し嗚咽号泣している遺族も大勢

見かけた。私は知人の葬儀に参列してこの惨状に接して胸が痛くなった。まさにこの世の地獄を垣間見る思いだった。

引揚げ開始

我々はもはや祖国からも見捨てられたと絶望のどん底であえいでいたが、ようやく渴望の引揚げが始まったのは、二十年十二月ごろだった。引揚げの順番は困窮者を優先にと日本人労働組合が決定した。これまでとかく強引な振る舞いが目立ち、一般日本人から遊離しがちだった労組ではあったが、この混乱を極めた日本人社会を引揚げまで何とかまとめ役を果たしてくれた功績は、一応評価に値した。私たち一家には二十二年三月になっても順番が巡ってこなかった。もう引揚げはあと一便で終わりという噂もあって気が気でなかった。そんな時に、Yという友人が心配して「おれの家族ということになりすまして一緒に引き揚げてはどうか」と熱心に勧めてくれた。こうして私たち一家も三月十九日に引揚船に乗ることになった。引揚者に対する労組の指令はいろいろだった。内地に持ち帰れる

現金は一人千円と言ったり、全然不都合と言ったり、その都度変わり戸惑った。いよいよ私たちが乗船するときには、もしも隠し持っていた者がいたらその団体は乗船させないという厳しいものだった。検査での発覚を恐れ、他の引揚者に迷惑をかけては相済みぬということから、乗船前のトイレには色とりどりのソ連軍票が無残にも多数捨てられていた。

私は、一文なしでは内地に上陸してもどうすることもできない、一人千円という情報の方が正しいはずだと判断し、乗船前に布団の四隅の綿の中に千円ずつ縫い込んでおき、残金は全部労組に提出した。

乗船するための長い廊下では、ソ連兵による荷物検査があり、彼らの小遣い稼ぎの場だった。引揚団の団長は、スムーズに検査がはかどり全員無事に乗船できるように、団員からカンパした袖の下用を持っていった。団長が検査官の横に立ち、「注射二本」と言えば会計係が二万円渡す手はずになっていた。ソ連側もなるべく多くの検査官に袖の下が渡るように配慮して交替させていた。全くずるいソ連のやり方だった。

大連よ、いざさらば!

私たち一家は、日の丸を掲げた日本の引揚船によく乗り込むことができた。

「ここはもう日本だ。ソ連兵とてここにはもはや手出しはできない」と心の中で叫んだ。途端に安堵感から嬉し涙が止めどもなく流れて、「大連よ、いざさらば!」と思わず大きな声を出した。

船内放送が始まり、一人千円の交換を伝えた。船内では「労組に騙された」と騒然たる騒ぎが起こった。

団長が交渉した結果、軍票なしで一人千円の日本札が手渡されることになって騒ぎはおさまった。私は、布団から取り出した四千円を交換した。

大連の街も完全に見えなくなり、海の色も黄色になったころ、デッキの方でまた騒ぎが起きた。一人の青年が多数の者に取り囲まれ詰問されていた。この青年は労組のシンパで、特大のトランクに軍票をぎっしり詰め込んで、船内の隅に潜んでいたのを見つかったのだ。みんなは興奮のあまりに、彼を裸にして殴るけるの制裁を加え、しまいにはロープで縛り海に向かって

吊るした。船長が驚いて飛んできて「乗船の員数だけは減らさないでください。員数が減れば停船して捜索しなければならなりませんよ」と叫んで彼を助け上げた。博多の収容所では労組員が殴り殺されたが、MPはこれを黙認したという噂まで船内に流された。大連での苦難の二年間、一般邦人は餓死と凍死の狭間に直面していたが、労組員だけは羽振りの良い生活をしてきた結果がこんなことになったのである。

待望の祖国にやっと上陸

日本に近づくにつれて、緑の美しい島々が視野に入ってきた。こんな美しい景観に接するのは久しぶりのことだった。私は感激で言葉もなかった。家族も無言のまま博多の街を見つめていた。

上陸したら、引揚事務所でアルバイトをしているという旅中卒の九大生が、私を見つけて万歳をして迎えてくれた。彼の連絡で旅中関係者が「銀飯」を持って駆けつけてくれたが、無性に涙がこぼれ落ちた。隣にいた引揚者たちにもおすそ分けしたが、子連れの母親は拝むようにして喜んでいた。

私は、収容所の別室においてアメリカ軍からソ連の
ことについてあれこれと質問されたので、自ら体験し
たり見聞したりした事実をことごとく話した。ここで
も米・ソの対立は歴然だった。収容所内での労組員に
対するリンチもアメリカは黙殺した。

収容所に四日間滞在しているうちに虎の子の四千円
も底をついてきた。所内において、兵役に従事してい
た者には申告すれば郷里までの汽車賃を支給するとい
う説明があった。最初のうちは兵隊なんてもう懲り懲
りだとあえて申告をしなかったが、しかし旅費支給の
魅力にとりとう申告をした。

係官は私に向かって直立不動の姿勢をとり「本日よ
り陸軍一等兵」と厳かに宣言して、掛川までの汽車賃
を支給してくれた。かくして私は、三月二十二日付を
もって「ポツダム一等兵」になった訳である。

郷里掛川駅に到着したのは三月二十四日だった。途
中広島駅で、原子爆弾で壊滅した市街の様子を垣間見
て、そのあまりの惨状に驚き、広島にいた妻の実家の
ことが気掛かりとなった。掛川駅では弟の秀雄の出迎

えを受け、一家四人は無事に郷里粟本村の我が家に落
ち着いた。

引揚げ後の生活

懐かしの我が家で引揚げの垢を流していた二十六日
に、戦中の昭和十八年に掛川に帰っていた旅高の曾我
教授より、至急に会いたいとの連絡を受けて訪問し
た。曾我さんは、二十二年四月から施行される新学制
により掛川町外三ヶ村組合立の掛川東中学校長に内定
しており、その校長代理に私をと、首を長くして待
っていたとのことだった。

情報皆無の満州で、内地の新教育体制についての知
識はゼロだったが、曾我さんの話を聞き、熟慮の末に
長年留守にした故郷への恩返し之机をだと考え決心
し、曾我校長を補佐して立派な中学校をつくろうと引
き受けた。

現実には校舎も校庭も無く、既設の小学校、高等女
学校の十一教室を借用して、四月二十八日に新一年生
五百八十三人を迎え開校した。実際に授業を始めたの
は五月三日であった。

ガランとした教室に机も腰掛けも無く、あぐらをかいて足の痛みに耐えながら授業を受けている姿を見ると、一日も早い独立校舎をと念願し、意欲はおう盛となり疲れも吹き飛んでしまった。

昭和二十四年四月、曾我校長の栄転に伴って校長を引き継いだ。どこの学校でも民主主義教育は手探りの時代、日教組活動が激化し各地で問題が起き、その対策も校長の重要な仕事だった。

待望していた校庭も、生徒やPTAの皆さんの勤労奉仕によって、ようやく整地され校舎も立派に完成した。二十九年に掛川市立西中学校に校長として移るまで基礎固めに努力をした。

あの生死を分け、苦難に満ちた満州、旅順、大連の避難生活を経て、今日まで終始教職の道で大過なく過ごし得たことに感謝する毎日である。

私の引揚げにまつわる苦労談

神奈川県 境 亨

戦前戦中の旅順市での安寧な生活

私と関東州旅順市とのかわり合いは、昭和六年二月に同市新市街大迫町の自宅で誕生したのに始まり、敗戦の翌月の二十年九月までの十四年七カ月間だった。敗戦後、早々にして進駐して来たソ連軍の厳命により、我々一家が故郷・旅順市の自宅と無念の決別を余儀なくされたのは、私が旅順中学校の三年生に在学中のことだった。新市街の一軒家のこの自宅は、両親や兄や姉たちにとっては、私よりはるかに長い実生活の苦楽の歴史を刻んだ掛け替えないものだったことは言うまでもない。

顧みれば、私の父次郎は明治四十三年ごろに、妻芳子（私の母）と幼子二人（長男正久と長女久子）を福岡県三潞郡大堯村の祖父母（信太郎とクラ）のもとに